

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年9月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科 西南アジア史学専修

職名・学年 非常勤講師

氏名 山本 孟

助成の種類	平成28年度 ・ 研究者交流支援 ・ 在外研究短期助成		
研究課題名	古代アナトリアの王国ヒッタイトによる地方統治の研究—象形文字ルウィ語碑文史料を用いて		
受入機関	中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所		
渡航期間	平成28年8月1日 ～ 平成28年8月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	510,000円	
	使用した助成金額	510,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空費および査証代など	171,700円
		移動費(日本国内)	4,870円
		移動費(現地)	163,162円
滞在費		170,268円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 広大なトルコにおいて各地方のレリーフを調査するためには、長距離を移動することになり、また地図にも載っていないレリーフを見つけ出すためには、毎回現地の運転手を雇わなければなりません。貴財団から助成いただいたことにより、経済的な不安を感じることなく自由に、また予定していた通りの旅程で各地の遺跡・レリーフをめぐることができました。心より感謝申し上げます。		

成果の概要／山本孟

「古代アナトリアの王国ヒッタイトによる地方統治の研究 —象形文字ルウィ語碑文史料を用いて」

報告者は、貴財団の助成を受けて、紀元前2千年紀後半の中央アナトリアに栄えたヒッタイト王国が直接支配した領域と間接統治を行った地域の境界を検討するために、平成28年8月1日から8月30日まで在外研究を行いました。今回の調査では、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所を拠点に、アナトリア中南部に残る、象形文字ルウィ語碑文が記されたヒッタイト時代のレリーフを調査しました。以下、得られた成果を報告いたします。

(1) 中央アナトリア南東部

トルコ中央部の南東に位置するカイセリ県では、象形文字碑文が記された4つのレリーフ(それぞれ地名からフラクティン・タシュチ・イマンクル・ハンイエリと呼ばれる)を調査しました。これらのレリーフは、ヒッタイト王国の首都遺跡ハットゥシヤから約250km南にあるエルジエス山南部に位置し、カイセリからアダナへ向かう幹線道路沿いに立てられています。これらは、紀元前14世紀頃ヒッタイト王国に併合されたアナトリア南部の国キズワトナと関係が深いレリーフであると考えられます。

フラクティン(Firaktın)のレリーフは、カイセリの市街地から南東に約70km、デヴェリという町のザマントゥ川の川沿いにある切り立った岩に刻まれています(図1)。高さ1.3m・幅3.2mの岩のレリーフには、紀元前13世紀のヒッタイト王ハットゥシリ3世と王妃ブドゥヘパがそれぞれ神々へ献酒する姿が刻まれていました。象形文字ルウィ語で書かれた王妃ブドゥヘパの称号は「大王妃ブドゥヘパ、キズワトナ国の娘」とされ、彼女がキズワトナという国の出身者であった点が強調されています。また同時代のモニュメントが、フラクティンから車で30分ほど南東のタシュチ(Taşçı)という村には、木々が鬱蒼と茂るザマントゥ川の岸にあります(図2)。二つあるレリーフの一方には3人の人物像が描かれており、その上にはヒッタイト王「ハットゥシリ3世の臣下であるマナジ」の名前が象形文字ルウィ語で刻まれていました。

次に、タシュチから約20km西のイマンクル(İmamkulu)村では、アダナへ続くゲズベルと呼ばれる険しい山道の入り口にある丘にレリーフが立っています(図3)。レリーフには、神々の隣に、象形文字で記された「クワラナムワ」という名の地方総督の姿が描かれていました。イマンクルから約8km東へ行ったゲズベル山道にあるハンイエリ(Hanyeri)のモニュメントにも、神の横に戦士の姿のクワラナムワの名前が象形文字で記されていました(図4)。

(2) 中央アナトリア南西部

トルコ中央部の南西にあるコンヤ県では、ヤルブルト・エフラトウンブナル・ハティプのモニュメントを調査しました。ヤルブルト(Yalburt)のモニュメントは、ウルグンという町の北西20kmほ

どの丘の上にあります(図 5・6)。このモニュメントは貯水施設と考えられ、20 個の石のブロックには、紀元前 13 世紀後半のヒッタイト王トゥドゥハリヤ 4 世(ハットゥシリ 3 世の後継者)がアナトリア西部の国を征服したことが象形文字ルウィ語碑文で記録されています。

ヤルブルトと同じくコンヤ県ベイシェヒル市北部にあるエフラトンプナル(Eflatunpınar)も、トゥドゥハリヤ 4 世の時代に建てられた貯水施設です(図 6)。象形文字は刻まれていないものの、正面中央に並ぶ嵐の神と太陽の女神、最下部に座する泉の神々の間を精霊たちが支える構図はヒッタイト人の宇宙観を表していると考えられます。

最後に、コンヤ市街地から南に 10km ほどにあるハティブ(Hatip)村の高台にも紀元前 13 世紀後半の碑文が残っています(図 7)。この碑文は磨耗が進んでいるものの、右端に描かれる神の後ろに「クルンタ、大王、英雄、大王ムワタリ、英雄の息子」という称号が象形文字ルウィ語で記されています。クルンタという人物は、楔形文字史料から、ヒッタイト王ハットゥシリ 3 世によってアナトリア南部の属国タルフンタッシャの支配者に任命されたことがわかっています。したがって、このハティブのレリーフはクルンタが統治したタルフンタッシャにあったのだと考えられます。

調査した 7 つのレリーフは川岸や湖など水源にありました。すべてにおいて神の姿が彫られていることから、これらは水を神聖視したヒッタイト人の宗教施設であったと考えられます。同時に、誰もが見える高台に設置され、象形文字ルウィ語で権力者の名前が彫られているため、これらのレリーフはヒッタイトの国境を考える上でも重要です。カイセリ県のレリーフは、ヒッタイト王国とその属国キズワトナの境界の地域を示しています。ヒッタイト王と王妃・王の臣下の名前が刻まれたフラクティンとタシュチは、中央政府が直接に支配した地域の最南東に位置し、一方、地方総督の名前が刻まれたイマンクルとハンイエリは総督によって間接的に統治されたキズワトナにあったと考えられます。また、コンヤ県に残されたものについても、ヤルブルトの碑文はトゥドゥハリヤ 4 世が遠征した西方諸国の近郊に設置されたと推察され、ハティブのレリーフもヒッタイト王が統治を委任したタルフンタッシャ国の境界あるいはその国内にあったと考えられます。

以上のように、今回の調査ではトルコ中央南部に残るヒッタイト時代のレリーフを踏査し、ヒッタイト本国と属国の境界の位置と周辺の地理的景観を理解すると同時に、それらに宗教施設としての機能を見出すことができました。今回の調査を踏まえ、今後は現地で写真撮影した碑文の読解・分析を行い、研究論文を執筆する予定です。

最後に、今回の在外研究では、受入先として滞在したアナトリア考古学研究所はもちろん、トルコ各地の発掘現場を訪問・滞在し、発掘状況を見学することもできました。加えて、各分野の専門家とも知り合うことができ、今後トルコで現地調査を行っていく上で貴重な経験となりました。改めて、貴財団のご支援に心よりお礼申し上げます。

图 1



图 2



图 3



图 4



图 5



图 6



图 7



图 8

